
あしたのでんしゃ。

あるふぁ@空鍋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あしたのでんしゃ。

【Nコード】

N6701V

【作者名】

あるふぁ@空鍋

【あらすじ】

飲み会のあと、電車で。アラレちゃんメガネ。

(前書き)

綿あめのように溶けてはならない。

「じつじつじつ」

時計の針よりも早く電車が走る。

『次はー・・・時計坂ー時計坂。』

彼女は時計坂の前の駅で降りた。

僕の家は時計坂からバス10分。歩くと20分。

彼女は特別何かしたわけでもなく、何かを持っているわけでもないという。

私にもよくわからない。手をだしても、何も見えない無色透明。なんとなくベージュの霞がかかったような、印象系。

時計坂を歩く。

坂という割には坂は少ない。

電車の中、「じつじつじつ」。

「つまり君は、とても変わってる。」

私は結構な量の嘲笑と、一類の羨望を以て評価した。批判とも取れる皮肉であるが、そんなもの到底理解できないだろうし、理解したとしてもいつもの様に反感を買っておしまいだ。

所詮高い年齢にエージングされている自立プログラムのようなのだから、高尚な精神的”ほぐし”行為は通用しまい。

「それは心外ね。」

わたしははっとした。何も考えていなかった肝臓がアルコールを分

解し始める。

「水分が足りないー

そうなのだ。きつと水分が足りていなかったから、饒舌に口火を切れなかったのだろう。」

「私はあなたに変わっているといわれるとショックだけど、楽しみね。」

その高圧さに僕は私ではなく僕になってしまふ。

私は何者か？従属者か？

主体性を持った完成の総合店は、つまりこの私。どうして愚弄に愚弄を返されてうるたえているのか？

まるでブラックジョークをブラックジョークで返すようだ。未恐ろしい。

「趣味はなんだい？」

この言葉は嫌いである。お見合いのようで嫌だ。

「趣味は特に思いつかないわ。見つけている最中」

またもやまるでシンカーの様に巧みな投球。

私には真意を測りかねる。

いや、真意などないのである。彼女にはただただこの場をやり過ぎると思うだけの知恵比べにすぎないのだ。

男などというものはぺちゃくちゃしゃべらせておけばそれでいい。

曖昧にうなづいておけばいいのだ。

そう理解している。それが賢い生き方だ。

彼女はそういう人間かも知れない。しかし、私はその変化球にバットを向けざるをえなかった。

「そうかい。それではでかけやうではないか。」

「楽しみにしてるわ。」

会話というものは時に成り立たないものであり、たいていはすべての意思疎通を行わないまま、無駄なエネルギーを消費して終了する。或いは勝手な思い込みが何かの方向へと勝手にドロドロと流れてい

くのである。

それは、その会話は今までにないくらいすつきりしたものであった。まるで透明なコップに注がれた純粹のように、汚され易く、しかし味気ないものであった。

しかしその味気ないものは真理であり、物理法則ではきっちりしたものである。

そこいら辺の雑草をはやくすような雨水とは比べ物にならない。

昔付き合った彼女のように、額縁から抜かなければ思い続けてしまふものではなく、今その瞬間が大切なのだ。

入念に観察されつくしたその瞬間は、一種のラフスケッチに等しい。ラフスケッチだ。私はその時を今になって思い出す。

眼も合わないラフスケッチは、部分部分を教養から高める素体の完成形である。

彼女のその時の表情は今も覚えていない。

しかし、その時の彼女の声音といたら、まるで未成熟な子供があげる鳴き声のように、力強い意志に満ちていたのである。

耳から入る情報だけで、私は夏の予定を変えざるを得ないかもしれない欲求にかられた。

イヤホンかもしれない。ヘッドホンかもしれない。何をつけていたかは忘れた。

彼女に手を触れたわけではない。約束もしていない。契約も。見えないもの。機械の様に動くものかもしれない。

時計坂の縁に。うなづく。

メールが届く。

機械と、人間の鼓動。

機械に、気持ちは伝えられないが、文字の連なりと意味の重なりに、行間を読んでしまうのは人間だから。

(後書き)

面白くないかもしれない、思念体。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6701v/>

あしたのでんしゃ。

2011年10月9日02時57分発行